

名久井農業高校の魅力化 大自然とまち全体が学びのフィールド

●ワークシヨップとは、もともとは共同作業場や工房を表わす言葉ですが、現在、よく使われているのは双方向性を意図したグループによる学びと創造の方法を指すようです。ここでは、6名の出席者による「フランクな語り場」の意味で用いました。

青森県立名久井農業高校は町民から「南部町立 名久井農業高校」や「農学校」と呼ばれ、地元では唯一の高校として親しまれてきました。

実際、令和2年（2020）8月には町・町議会・PTA・後援会・同窓会が連携して名久井農業高校の「応援団体」を設立、

令和5年（2023）度からは生徒の全国募集を導入することを決定しました。

また、下宿費用の助成ほか、数々の生活支援、研究・実験活動を支援する

「名久井農業高等学校みらい人材育成事業」の継続、そのほか高校魅力化コーディネーターを委嘱し、「なんぶ留学」関係者交流会の開催も行っています。

出席者

根市大樹（名久井農業高校魅力化コーディネーター／学校

運営協議会委員長／NPO法人「学びどき」理事長）

田多奈央（名久井農業高校2年／生徒会長）

多田聡大（同／地域みらい留学生代表）

出町孔汰（同／農業クラブ会長）

高森満雄（名久井農業高校教諭／農場長）

佐藤広大（同／農業クラブ主任）

開催日 令和8年（2026）3月16日（月）

場所 名久井農業高校会議室

「名農」を選んだ理由と魅力

根市——名久井農業高校魅力化コーディネーターとして、このワークシヨップ全体をまとめていきたいと思っています。よろしくお願ひします。

僕自身、この名久井農業高校のことがすごく大好きな人間の一人として、まず皆さんに聞きたいのは、名久井農業高校って皆さんにとつてどういうところかなということです。

田多——やはり農業高校って、他の高校では学べないことを学べるんじゃないかな。



座学のほかに実習や地域での活動も多いので、頭だけじゃなく、体全体の色々なところから知識や情報が入ってくる場所だと思えます。

多田——地域の人と交流していくのが名久井農業高校の一番の強みという魅力です。地域の人のつながりによって僕たちの活動が成り立っているのではないかと考えています。

出町——最初は目的があんまりはつきりしていなかったとしても、これからやりたいって思えることがたくさん見つかる場所だと思う。学科では農業と工業、それぞれ学べるという機会があるので、その中で自分の強みを探すことができたり、課題研究に没頭したりもできる、いい学校だなと思います。

根市——出町君はこれから1年間、農業クラブの会長として活動するわけだけど、やりたいこととか挑戦してみたいことってというのはあるの？

出町——僕ら環境研究班メンバーが、さまざまなコンテストや大会で研究成果を発表し、積極的に自分たちの活動や学校のことを広めていきたいというのが一つ。それと農業クラブ以外の生徒の皆さんも、より名農の魅力を発信できるようになればなと思っています。

根市——多田君は千葉から「地域みらい留学」の制度を活用して南部町に来ているわけだけど、なんでこの高校を選んだの？



根市大樹さん

ワークショップ 名久井農業高校の魅力化

大自然とまち全体が学びのフィールド



田多奈央さん

多田——中学校の頃から農業を学びたいという目標を持っていたから、

というのが一番大きいですね。地元の千葉県の中で探したけど、農業高校というものの自体があまりなくて、通うにしても、

家から遠かったんです。じゃあもう、どこか県外に出ていった方が、自分が成長できるんじゃないかなと。

根市——田多さんは、なぜ名農に？

田多——中学校の時は、まだ自分が何をしたいのか、何になりたいのかっていうのが定まっていなくて、色々な高校の資料を見ましたが、農業高校は普通高校と違って個性적인というか、テーマが定まっていて、専門性が高いじゃないですか。そこに引かれました。

名農らしさと楽しい授業

根市——では、高森先生と佐藤先生、先生方から見た名農らしさって？

佐藤——やはり地域とのつながりがすごく強いことが特色じゃないでしょうか。地域の方が「農学校」っていう愛称で呼ん

で、地域に欠かせない存在として温かい目で見守ってくださる、この距離感は、他の高校では体験したことがなかったです。

生徒は生徒で、資格取得などに惜しみなく努力しています。「アグリマイスター顕彰」という顕彰制度がありまして、それは、在学中に取り組んだ活動や検定、資格、コンクールなどでの成績を点数化して評価する制度なんです。合計得点に応じて「プラチナ」「ゴールド」「シルバー」の称号が認証されるのですが、令和7年（2025）は認証率が90パーセントを超え、生徒たちの努力がよく見られました。

根市——高森先生から見えてどうですか？

高森——そうですね。当校は、生徒がみんな素直だと思います。小規模校だからこそ、先生方も細やかに声かけができるし、先生のサポートを受けながら生徒もグループ活動がしやすい、そういった環境が整っているのかなと思いますね。

根市——地域住民の一人でもある僕から見ても、先生方のお話はよく分かります。校内どこにいても、先生と生徒の仲がいいなと思って見えているんですよ。生徒は先生を恩師として敬っている一方、友達のような感覚もあり、ちょっと家族にも近い関係性だという気がします。

佐藤——きちんと反応が返ってくるので、授業も農業クラブの活動も、工夫のしがいがあります。

根市——授業はどうですか？ 出町君。

出町——そうですね。授業は間違いなく楽しいです。先生との距離感がだいぶん近くなって思いますが、それは少人数だからだけではない気がしますね。

多田——普通高校にはない教科が多いのは、ちよつと大変だなとは思うんですけど、新しいものをたくさん知れるという面では、すぐおもしろいなって思います。

根市——外に出る授業もかなりある？

出町——一番楽しかったのは野菜作りです。今回は水耕栽培をメインでやってきたんですけど、僕も将来は水耕栽培ができればなと思っているので、実践的に学べて、得るものが大きかったです。

根市——多田君はどうですか？ たしか野菜を使って漬物を作っていたよね？

多田——京都への修学旅行で漬物作りを体験しました。あと、寮の前で枝豆も栽培しましたね。

根市——どこに行っても何か作っている(笑)。まさに学んだことを実践していますね。

地域活動と名農の存在意義

根市——では、地域活動でみんなが印象に残っていることを教えてもらいたいなと。

出町——1年生の時に農作業支援活動があって、その中で地域の農家さんにお手伝いに行ったことが印象に残っています。お手伝



多田聡大さん

いする中で地域の農家さんのリアルな声が聞けたし、実地練習ができる貴重な機会でもありました。

根市——具体的にどんな声を聞きましたか？

出町——やはり人手不足です。「ぜひ若い人に来てほしい」と話されていました。

根市——私も地域の農家の一人ですが、同感ですね。名農の生徒さんたちには、いずれ地域の農業をリードしていただけたら嬉しいです。では、田多さんはどうですか？

田多——毎年5月に野菜苗の販売会、10月末から11月初め頃に農産物の販売会があるのですが、そういう学校行事の時に、南部町内外の方々へ接客をしたのが刺激になりました。お客様1人に対して生徒1人がついて、1対1でお話するので、その時に農業に限らず、社会の色々なお話が聞けました。

「頑張っているね」とほめてくださる方も多くて、嬉しいなって思います。

根市——名農祭と併せて行われる農産物即売会は特に人気で、たくさんのお客様が来ますよね。名農祭の2日間、例年合わせて千人近く

が来場するとか。多田君は地域活動についてはどうかな？

多田——地区分会の活動が一番の思い出です。

根市——地区分会では生徒さんが、それぞれ住んでいる地域ごとに分かれてボランティア活動をするんだよね。多田君のチームは何をしたの？

多田——高校近くにある「チェリーこども園」の子どもたちと一緒に花壇の整備をしました。子どもたちがとても頑張ってくれて、かわいかったですね。

根市——日頃から高校に子どもたちがお散歩に来たり、農業体験に来たりして、南部町や八戸市のこども園との交流があるのも、名農の特色と言えますね。食育の観点から見ても、地域の基幹産業である農業を知ってもらう意味でも、名農の存在意義は大きいと思います。ほかに地域とのつながりということと言うと、お祭りに参加していますよね。

高森——全校で「名川秋まつり」に参加しています。トラックの荷台にダイコンなどの農産物を積み込んで行き、会場に来たお客様に無料配布します。おかげさまで毎年たいへん多くのお客様に喜ばれていますね。

根市——ダイコンの本数でいうと、どのくらい？

高森——毎年千本程度ですね。9月にその本数を揃えるにはなかなか大変なんです



出町孔汰さん

よ。新鮮な状態で配布するために前日に収穫し、洗って準備するのですが、生徒が大活躍してくれます。

課題研究と環境問題

根市——あと思いつくものというところ、課題研究ですか。2・3年生の生徒が授業の中でグループごとに研究活動を行っていて、コンテストなどでの受賞歴も華々しいですね。

佐藤——そうですね。地域の特産物や自然環境をテーマにした研究を行うチームもあります。コロナ禍で地域との関わりが縮小気味になっていた時期もあったのですが、今また少しずつ広がってきています。毎年12月に、研究成果の披露の場としてプロジェクト実績発表会を開いておりまして、令和7年（2025）度に関して言えば、外部の方にも見ていただける形にしたところ、八戸市内の中学生が発表を聞きに来てくれたんですよ。嬉しい驚きでした。

根市——課題研究は、生徒たち自らが研究テーマを選ぶんですよね。ほかの高校ではなかなかできない経験だと思いますが、先生方から見ると、課題研究の醍醐味（だいごみ）はどういうところですか？

佐藤——そうですね。生徒たちが自分のアイデアを話せるようになる、積極性を持つというところですね。今回、全国ユース環境活動発表大会で環境大臣賞を受賞した



佐藤広大先生

ワークショップ 名久井農業高校の魅力化

大自然とまち全体が学びのフィールド



高森満雄先生

だと思っています。

根市——課題研究は、生徒の主体性を引き出す場になっているんですね。

高森——そうですね。課題を見つけて、それについてグループで意見を出し合いながら解決していくというプロセスを学んでいるので。成功と失敗を繰り返して二つのものが出ていくという過程こそが学びですし、その成果を評価されるころまでやるというのが、さらに一段階、学びを深めていると思っています。

佐藤——外部の視点が入ると、緊張感が全然違うんですね。だからこそ生徒たちは

すごく伸びる。高校生の時期に、専門家の方が自分たちの研究に対してコメントしてくれるという経験を積めるのは、大きな財産になっているのでは。

根市——せっかくなので、生徒の皆さんに、そ

れぞれの課題研究について話してもらいます。

田多——私たち野菜班でやっているのは「バイオステイミュラント」という農業資材を使った作物の栽培方法についての研究です。バイオステイミュラントは、一般的な肥料とも農薬とも違って、植物や土壌に作用して、植物の本来持っている機能を最大限に引き出そうとするものなんです。

例えば地球温暖化で起きている高温や乾燥なんかには耐えられる作物を作れないか、というようなことなんですけど。半面、バイオステイミュラントの正規品は、値段が高いのが難点なんです。でも、身近な素材から作れる代用品もあって、卵の殻と酢酸を一緒にして酢酸カルシウムを作って、それで野菜を栽培するという風な感じでやっています。

多田——僕たち農村文化班は、地域の里山、農村地帯をどう守るか、そして今後、未来の世代にどう伝えるかということを研究しています。具体的には、里山の資源を活用した産品作りですね。例えば、南部せんべいに木の実を混ぜたり、里山の植物を使ってクラフトコーラを作ったり。色々なアイデアを試しながら、将来につなげられたらと思っています。

出町——僕は環境システム科の中で環境研究班というところに所属していて、さまざまな環境問題について考えています。高校生

らしい視点で、さらに、自然に触れ合っている独自の視点で、環境問題に対する対策や解決法を探究するというのが僕らのコンセプトです。

根市——地域から視野を広げて、世界の環境問題に着目しているんだね。

出町——直近だと、国連が定めた「世界食料デー」に関して、唯一、高校生が活動に取り組んでいる団体として認められました。

根市——実際にどういう分野に興味を持ち、どういう取り組みをしていますか？

出町——一番興味があるのが気候変動です。中でも特に気温上昇の対策として、新しい水害防止法の研究を行っています。

自分たちの将来像

根市——ほかにもさまざまな学外での活動が名久井農業高校にはあって、令和7年度にも表彰を受けているものが多くありますが、目立つものと言うと、佐藤先生が話された環境システム科の栽培環境班が大阪・関西万博で除草剤を泡で散布する研究を発表して、最優秀賞に選ばれたこと。出町君もこのチームの一員でしたよね。

佐藤——大阪・関西万博で開かれた「Q-1（キューワン）U-18が未来を変える研究発表SHOW2025年大会」ですね。文部科学大臣賞にあたる「最優秀イノベーター」をいただきました。



（根市さんと生徒たち
（母水耕栽培ハウス内）

高森——あとは令和8年（2026）の第13回「高校生ビジネスプラン・グランプリ」で審査員特別賞を受賞、ビジネスモデルになりました。さらに先ほども話題に出た「全国ユース環境活動発表大会」で最優秀賞にあたる環境大臣賞を受賞。そのことで南部町から「善行表彰」も受けましたね。

根市——では、生徒の皆さんに最後に聞き

たいのですが、実際自分たちはこういう人になりたい、こういう仕事をしてみたいっていうのはありますか？

出町——僕は南部町で就農を目指したいなと思っています。僕の家は、祖父の代あたりまでは農家だったんですけど、ちょっと色々あって農家をしばらく辞めているので、今も残っている土地を生かして農業を始めたいなと。最初は自分でやれる範囲から、果樹や野菜の栽培をしていけたらと考えています。

多田——これからの社会では、農業だけでなく色々なことを多角的にやるのがいいんじゃないかと思っていて、自分なりに考えていることはあるんですが。旅が好きなので、旅も一つの軸にしたいな、とか色々々々。

根市——田多さんは出身は南部町だっけ？

田多——八戸市です。中学校の時はあまり勉強をやつてこなかったのですが、でもここに入ってから専門科目とかをやつていくうちに、学ぶことの楽しさを知ることができました。「学べる人」になりたいっていうか、経験を活かせる人になりたいっていう思いはあります。

根市——3人の皆さんの考えはよく分かりました。いよいよ皆さんは来月から3年生になるわけで、進路ももちろん考えなきゃいけないんだけど、これからの1年間で色々チャレンジしてみてください。今日はありがとうございました。

一同——ありがとうございます。